

辰野  
隆

鈴木三重吉との因縁



# 鈴木三重吉との因縁

——喧嘩口論は酒の下物——



昨日も今日も、しとしとと雨が降る。逝いて未だ墓標の墨痕も乾かぬ三重吉氏の、在りし面影を偲ぶにふさわしい日である。緑に濡れた庭の樹々や芝生を折々眺めやりながら、久しぶりで、その昔愛誦したもみやま朧山版の『千代紙』を書架から取り出して読んだ。正に三十年を隔てて、旧友に会する懐しさの油然として湧き来るのを覚える。

叩きつけ申候 殺されてもよろしく候 千代紙く

未来は夫妻に候

かしこ

三重

豊殿まるる

という跋に代えた著者の言葉を繰り返して誦しつつ此の集に収められた『三月七日』、『千鳥』、『山彦』を徐ろに読みはじめたのであった。豊殿とは松根東洋城氏のことであろう。巻頭には、「先生より」として、夏目漱石の手紙を序に代えて挟んである。

拜啓 書物の名前は愈々千代紙と御定め由、千代  
 紙は至極思つきと存候、表紙の意匠は東洋城担任の由、  
 先日の面会の折色合模様等逐一講釈を承はり候、校  
 正も小宮氏引受けのよし、是又好都合に候、発刊の日  
 は君もうれしく候、両人も嬉しく候、小生もうれしく  
 候、さて頂戴の栄螺さざなえは大いに結構あれも甚だうれしく  
 候 以上

二月二十三日

金

三重吉様

二月二十三日とは明治四十年の二月二十三日である。本書が靄山書房から出版されたのは同年四月一日であった。

『千鳥』や『山彦』がホトトギス誌上で発表された当時から既に僕は三重吉氏の愛読者となっていた。『山彦』は、たしか、漱石の『野分』とともにホトトギスの春季か秋季の増刊号に掲載されたように記憶している。僕は是等の好短篇が『千代紙』と銘打った単行本となつて、世に出る日を待ちかねて、買いつけの書肆しょしの店頭を幾度か空しく過ぎたり、店の主人に未だ出ぬか出ぬかと訊ね



たりしたことを今もなお昨日のように思い出すのである。今、三十年前の『千代紙』を手に把って、懐旧の情をこめて眺めると、往年の数々の思い出が古酒の幽かすかな泡の如くに心の底から浮んで来る。

僕は高等学校から当時の法科大学の過程を終えるまでの数年間に、幾度か学業を廃して自適したいという念願に襲われた。それは何も当年流行していた人生問題に苛さいなまれたためでもなく、恋愛問題に悩んだわけでもなかった。そういう青年らしい深刻な煩悶は何一つ経験しなかったけれども、生来の怠惰癖が高じて、兎角規則的な生

活が厭わしくなり、ただわけもなく瀬戸内海の小さな島に移り住んで水先案内にでもなろうかと、しきりに考え込むことがあった。斯ういうものぐさな憧憬を僕自らオブロモフィスムと名づけていたが、僕のオブロモフィスムが始まると、必ず瀬戸内海の島と水とを想い、内海の夢想から、僕はいつも『千鳥』の一節を記憶の裡に探っていたのである。

「築地の根を馬の鈴が下りてゆく。女が歌ふ。障子を明けて見ると、麓の蜜柑畑が更紗の模様のやうである。

白手拭を被つたのがちらちらと其中を動く。蜜柑を積んだ馬が四五匹続いて出る。矢張り白手拭の女が引いてゐる。畑は斜に広がつて末は夕方の色と溶けてゆく。……山畠の彼方此方を馬が下りる。馬は犬よりも小さい。首を出して見ると庭の松はづれから海が黒く湛へてゐる。影の如き漁船があと先になつて続々帰る。近き干潟の仄白い砂の上に、黒豆を零したやうなのは鳥が下りてゐるのであらうか。……青松をしたたか背負つた頬冠りがとこくと畦道をゆく。間もなくして此方を背に、道について斜に折れると思ふと、其男は最

早只大きな松葉の塊りへ股引の足が二本下つたばかりのものとなつて動いてゐる。それが蜜柑畑の向ふへ這入つてしまふと暫く近くには行くものの影が絶える。

谷間々々の黒みからだんと此方へ迫つて来る黄昏の色を、急げくとはた機の音が招くのである。」

これは恐らく瀬戸内海に臨む田園の一情景であろうが、今改めて読み直して見ても依然として懐しい。僕の夢想の島はこの海岸から遙かなる沖に、鶯餅のように霞んでいなければならなかつた。水先案内たる僕はその島

に、忠実な老水夫とたった二人で住む筈であつた。

要するに、三重吉氏は生来散文的な僕にさえこれ程の空想を描かしむるほどの、溢るるばかりのリリスムを所有していたのである。単に『千鳥』ばかりではない。山里に古り住む豪家の奥に、秘められた古き代の恋物語とそれをめぐる姉と弟との寂びて艶なる風懐とを描き出した『山彦』も亦、当時としては新しき地方主義の代表的佳篇として永く読者の胸中に沁みこんだのであつた。

寺田寅彦の『藪柑子集』の跋として、小宮豊隆氏は、

「……集中に収められた『団栗』や『竜舌蘭』は三重吉の『千鳥』の父であり、漱石先生の『草枕』の祖父である……」と書いたが、寅彦、三重吉及び中勘助の三者は、その創作の最初期から心の故郷を持った作家であつた。特に三重吉氏のふるさとは都から遠い中国の、温和にして、淋しい自然であつた。而もその文学的領土に於ては彼は疑いもなく一国一城の主であつた。僕はあたか恰も『聖ジュリヤン』や『エロディアス』の作者から招かれるように、『千鳥』や『山彦』の作者から招かれて、古き代に、遠い鄙いなかに旅した読者であつた。

去月二十六日、小宮氏と旧友湯沢三千男氏と三人で久し振りに閑談を交えた夜、僕は初めて小宮氏から「三重吉が重患だ」ということを聞いて驚いたのである。此度は助かるまい、最早や時日というよりも時間の問題となつたらしい、と云つて小宮氏は感慨無量の面持であつた。その時、僕等は、三重吉氏の作家生活を顧みて、明治の末年から大正初葉の文壇に介立して、特殊な取材と稀有な情調に於ては、彼は断じて他の追隨を容さぬ、小国の王者であつたと認め、その人将まさに逝かんとすと聞いて洵

に黯然あんぜんたらざるを得なかつた。

三重吉氏の初期の佳什に深い愛著を持って今に易かわらぬ僕は昨年の或る冬の夜、小宮氏の紹介に依はつて甫はめて『千代紙』の作者と相見たのであつた。その夜、小宮氏と僕は半歳ぶりの久潤を慰するために、浜町の或る旗亭で盃を交わしていた。酒半ばにして小宮氏が思い出したように、実は三重吉が折があつたら君に一度会いたいと云つている。彼の愛息に英文学を修めさせようか、仏蘭西文学を修めさせようか、今のところ、どちらとも定めかね



ている。そこで、君にも会って一応意見も聞いて置きた  
いという話なのだ。会うか、会うなら今直ぐ電話で呼び  
出すことにするが、いいか。勿論僕に異存のあろう筈も  
ないので、言下に快諾した。三重吉氏を待つ間に、小宮  
氏は来たるべき客の酒癖について少しく説明するところ  
があつた。どうも奴さん酒を呑むと一寸からんで来る癖  
がある。初対面の人にも往々憎まれ口を利くようなこと  
が無いでもないから、そこは予め含んでおいて、軽く受  
け流してくれ。悪気なぞは毛頭ある男ではないのだから、  
と親切に注意してくれた。僕とて多少の低気圧はあつて

も、大体五風十雨の言動に終始する男だから、小宮氏の善言に対して、即座に「心得た」と答えた。やがて三重吉氏が席に現われた。僕が初対面の挨拶をしようとする、彼はそれを手で制して、挨拶なんか廃めよう、と云いながらどっかと胡床あぐらをかいた。見ると彼は少し酔っている。

三人は飲みはじめた。かれこれ一時間も雑談した後で、小宮氏が、どうだい席を更えて飲み直そうじゃないかと云って立ちあがった。三重吉氏も僕も小宮氏の言うがままに腰をあげて後に従った。小宮氏は二人を呉服橋の

或る旗亭に連れて行つた。三人は其処でまた飲み出した。ちびりちびり飲りながら、僕は三重吉氏が少ししやがれた声で小宮氏に語る言葉を注意して聴いていたが、氏の感覚が異常に鋭いのに気が付いて、僕は強い興味をそそられた。氏にも僕にも一面識ある某夫人を評して、「あれは看護婦長のようだなあ。」と言つたので、僕は思わず破顔一笑した。すると氏は更に後から、「あの女は何だか石油臭いところがある。」と付け加えた。僕はこの評言の裡には何か動物的乃至植物的に鋭敏な感覚が蠢うごめいていると思つて、三重吉氏のような人は恐らく特殊な

氣候風土でなければ竟つひに所を得ない芸術家ではなかろうかと推察した。酒が旨くなつて来た。

そのうちに、三重吉氏と豊隆氏との間に或る俳句の本家争いが始まつた。問題の句は、

短夜の雨となりたる別れ哉

というのであつた。ところが三重吉氏は、それは俺の昔の句だと言う。豊隆氏は馬鹿いっちゃいけない、俺の句さ、と言ひ張る。結局その句は豊隆氏のものと決まっ

たが、僕は黙って、この穏かな争いを、面白く聴いていた。短夜の雨となりたる別れ哉！ どうだいなかなか佳いだろう、とこんどは豊隆氏が僕の同意を求めた。別に遠慮する間柄でもないから、その句は男同志か或は女同志の別離を指すものなら相当な句と思うが、男と女の別離ならきたならしい句だと答えた。こんどは三重吉氏が「ふん！」といつて相手にならなかつた。だんだん酒がまわつて来た。三重吉氏の語調や態度に何処となく棘々とげとげした我儘なところが現われ始めた。徐ろに氏を觀察しながら、此の男の唯我独尊癖には世間に対する不平が相当

に籠っているのではないかと思った。飲むに従って、氏の言動が漸く露骨になって行つた。僕に話しかけたり、盃をさす度毎に、「おい百姓！」という言葉が度々氏の口から漏れるようになった。「ははあ、先刻小宮氏が注意してくれたのは是れだな。」と思つたので、僕は別に気にも留めずに、盃を重ねていた。そのうちに三重吉氏の百姓呼ばわりが愈々猛烈になつて来たので、僕は一応注意を促した方がよさそうに思つた。相手が怒つたら怒つた時で、それから先の出様もあると肚を極めると、僕は自分の語彙の中から特に念入りなフィガロ式敬語を択

んで、思うところを開陳に及んだのである。

「おい、三重吉つあん！ 今日、おめえと俺とは初対面なんだぜ。ところで、さつきから俺のことを頻りに百姓百姓って言ってるが、全体俺の何処が百姓なのか、一寸説明して呉れねえか。」と先ず、うやうや 恭しく伺いをたてる  
と、三重吉氏は永年の喘息で少し出目になった目玉をぎろつかせながら、

「百姓いうたら百姓じや、何処から何処までも百姓じや。」と盃を僕の目の前に突きつけて「飲めいうたら飲めえ！」

と愈々語気が鋭くなった。こいつあ、なかなか話が面白くなつて来たわいと、僕は益々ガヴロツシユ的礼讓を發揮して言上することにした。

「ふうん、そうか。それじゃあ俺の方にも言いてえことがあるぜ。俺の面つきやからだを眺めて百姓というなら、おめえから言われぬうちに、此方から先に承知なんだが、何処から何処まで百姓だというなら、俺の方にも些ちっとばかり文句があるんだ。おめえ今、『飲めいうたら飲めえ！』とか何とか云つたね。が、そりや一体何処の国の何んて村の言葉だい。血統ちすじは熊襲くまそだが、これでも生れは



赤坂で氷川様の氏子なんだ。あんまり気の利いた江戸ツ子じゃねえが、それでも生れてこのかた、俺の近所じゃ、おめえのような糞尿臭こえたざせえ言葉は聞いたことがねえぜ。今、酒を飲んでるとこは日本橋だ。さつきから酌をしている女達の言葉にも別に訛りのねえところを見ると、いずれこの界限の女達だろうが、こいつ等が俺の言葉とおめえの言葉とを聞き比べて、どつちが都の弁舌だと思いか知ってるかい。『飲めいうたら飲めえ！』なんて、ちやんちゃん坊主のラジオ体操じゃあるめえし、そんな掛け声じゃあ、盃の酒が腐らあ。何とか都らしい言葉で、

俺が『よし来た』とか『あいよ』とか快く引受けられるような酒のすすめ方をして呉れねえか。黙ってるのを見たと、何にも言えねえんだな。それじゃあ、俺が教えてやろうか。『飲めってったら、飲まねえか』とか、『まあさ、飲みなよ』とか……ねえおい、そうだろう。『飲めいうたら飲めえ！』じゃ、一向グビがノドノドしねえや。』

と、まあ斯う云った工合で、僕流の駄弁ベラデイツクを僕流のフォネテイツクで御教授に及んだわけであった。これには流石の唯我独尊先生もことの外御立腹の様子に見

受けたが、斯かる慇懃な売言葉や買言葉になると、僕には学校の講義よりは遙かにアツト・ホオムなので、レジヨナリズムの文学者は、一寸たじたじの気味だった。

一時、座が白けて、酌をしていた女たちはきよとんとしているし、豊隆氏は豊隆氏で、「とうとう始めやがった。だから言わないこっちゃんない。」といった顔つきで苦り切っていた。その夜我々は竟に三重吉氏の愛息の修学問題には触れずして、結局、いい気持で、泥酔して別れた。それが、『千代紙』の作者と僕との最初にして、而も最後の会見であったのだ。もしこれが甘くも辛くも

ない、国際連盟のような、お座なりの挨拶で終始したのなら思出にも何にもならなかつたろうが、幸いにも初対面の二人に「この野郎、こん畜生奴」という非妥協性があつたので、唯一度の縁えにしからるるも縷々として尽きぬ懐しささがが湧いて、それが『千鳥』や『山彦』を慕う情けと溶け合うのである。

『千代紙』を読んで今更のように気の付くことは、三十年前の読後の印象と、今日のそれとの間に些の変りもないうことである。当時清新であつたこの集が今なお少しも

古くなっていない。それは、一つには『千代紙』自体が、近代都市の目まぐるしい変貌や送迎に慌しい尖端的時代思潮の圏外に優游する作品であるからでもあるが、而もそれ以上に、この集には流行を一蹴し得る不易のリリスムが貫流して、卓然たる三重吉王国を建立しているからである。そこに、ドオデエやエジエジップ・モロオの短篇やロオダンバツクの『死都ブリユジュ』などに通う至純な詩情の脈々たるのを痛感して、僕の心は潤うのである。

『千代紙』は、子規の写生文から筋を引いたホトトギス

派の散文体であるが、それに絹漉しの浄瑠璃式文章の味も少し加わると同時に、ロセツテイやバーン・ジヨオンズのプレ・ラファエリット情調も紙背に揺曳ようえいしているようである。

若し三重吉王国に於ける唯我独尊主義が梃てこでも動かぬ強烈な自意識の上に建てられていたなら、小国の安穩は永く乱されなかつたであろう。ところが、喬木をも倒す自然主義の暴風雨が起つた。その時から三重吉氏の苦悶が始まったのである。彼は生国を失つた人（デラシネ）となつた。『黒血』や『櫛』の如き作品にも、彼特有な

美しい表現は各所に散見するに拘らず、一度自然主義の嵐に深く傷いた彼の抒情主義は乱れて糸の如く、やがて『桑の実』をコンヴァレサンスの蒼白な記念として黙す他はなくなつた。然しながら三重吉氏の喘ぎは断じて氏の敗北ではなかつた。寧ろ新たに道を求むる間の休息であつた。

去月廿八日の朝日学芸欄に森田草平氏の寄せた追悼文の中に次の言があつた。

「……要するに、明治三十九年から大正四年に至る十

年間が、彼の作家として最も華々しい活動を続けた時代である。彼はすゞ子冊吉の二子を文学者らしい気持で溺愛してゐた。何でも、すゞ子が生れて物心が附くやうになつた時、お伽話を讀んで聞かせようとしたが、いづれを見てもひどい物ばかりだといふので自分で童話の創作に取りかかつた。これが爾来彼の童話を専門にして、終には自ら童話雑誌『赤い鳥』を発刊して今日に及んだ動機だと伝へられる。凝性だから、何でも遣り出したら最後まで徹しなければやまないのが彼の性分であつた。童話の製作から、彼は児童の作文の指



導者に移つた。中央公論社から出版された『綴方読本』はこの方面に於ける彼が二十年間の苦心の結晶である。」

啄木の歌に「友がみな我よりえらく見ゆる日は花を買ひ来て妻と親しむ」というのがあつたと思うが、三重吉氏も自然主義の嵐の後に、淋しく自分の姿を顧みたことであろう。彼の傍には愛する子が縋っていた。而して、愛児の背後には幾百万の少年少女が、「赤い鳥」を俟まっていたのである。「赤い鳥」は芽出度く生れて、健かに

育った。草平氏の謂える如く『綴方読本』は正に三重吉氏二十年間の粒々辛苦の賜に相違ない。この貴重な読本は日本の津々浦々の少国民の心に咲きいでた、色さまざまな薰りゆたかな花であるのみならず、それが将来わが邦の青年壯者の文学となつて見事な実を結ぶ希望をも多分に蔵する点に於ては、正に空前の名著であり、而もその中心には我等の三重吉氏が指導者の席を占めているのである。氏は『綴方読本』の序に曰く。

「往年、『赤い鳥』の綴方が、まだ今日の発達の半ば

にも至らないころ、現存の文壇の名家某君が、そのときの入選綴方を見て、『今後は作家も君のところへ入選しなくては文壇へ出さないことにしたいね』と冗談を言つたことがあつた。作家たちに、いはゆる表現のまづい徒輩が多いことの無用な痛罵よりも、より多く、児童のすばらしい把握と感受とに驚いた賛辞であつたのはいふまでもない。」

又曰く。

「……私の論述は、内容にも、機構にも、他の人の所説や工夫を踏用したところは一点もない。すべてが、私自身の創意である。」

この序文並に『綴方読本』後段の論述にも、竟に銷しとぎ尽すに至らなかつた三重吉氏の独尊癖乃至排他癖が露われてはいる。が、然しその癖には既に昔の弱さ脆さを見出すことは出来ない。在るものは唯氏の誤らぬ指揮棒につれて力強く唱歌うたい弾奏かなずる日本児童群の大合唱であり、大オルケストルである。

鈴木三重吉たるもの、宜しく大手を振って極楽浄土への道歩む可きである。此経難持。若暫持者。我即歡喜。

(昭和十一年夏)



日本文学電子図書館

---

鈴木三重吉との因縁

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館